

有機的世界観と個人の存在価値への帰還としての福祉的具体化

牛 津 信 忠

抄 録

この稿においては、われわれがこれまで述べてきた福祉論（相互的人格主義及び場の理論を含）と、ホワイトヘッド等の有機的世界観に添った議論とを融合させながら、福祉問題ないし「生き辛さの位置づけ」の解明を深めていきたい。それにより一たる人間存在の価値充足を現実世界の延長の営みのなかで确实視できる福祉論を築く土台を見出してゆきたい。その考察は、福祉実践の実質化が、人間の物化的対象化に結果する自我論上の解明（M. シェーラー）を越え、真の人格的確立と主体の形成へと連続するとともに、存在の永続性、さらには宗教的次元の人間存在への歩みにも繋がることを明確に示すことになる。

キーワード：帰還，存在価値，有機的世界観，相互的人格主義，物化的対象化

- 1 人間の一たる存立条件の整備と人間福祉実践・施策
- 2 厚生（福祉）基準論の段階的高揚についての考察
- 3 人間福祉と「抱握」から「延長」，そして全体への道
- 4 Process Goal への道をたどりゆく人間の生
- 5 一たる存立の相互性基盤としての福祉：理念，構造，作用
- 6 土台が作用化し，作用が土台を作り，生命プロセスが築かれていく
- 7 福祉実践が人間世界の歩みの条件を整備する

結語

1 人間の一たる存立条件の整備と人間福祉実践・施策

「人全てにおいて人権は尊重される」。世界人権宣言⁽¹⁾に、この理念は集約され、以降、なかに込められた人権に関する理念は世界に流布され、われわれの世界における根本思想として定立されている。即ち全ての一たる人間の存在は人間らしい存立（生）を保障されている。明示された存在

条件を真に実現する理念、技術、政策は既に確立されているはずである。しかし言うまでもなく世界の現状は、先進国といわれる国々においてさえ、ここにいう人権思想が国内及び対外的な関係において確実に履行されているとはいえない状況である。

われわれはこの人権論の内実をさらに掘り下げ存在の全てにわたって適用可能な思想として高揚させ、人全ての生存の根底を支えるさらに堅固な内容として細部にわたって定立させる為の論理的整序をなす必要を感じる。われわれはこれまで、存在の根底に迫ることによって、特に生き辛さのなかにある人の現実を発して、人全ての一たる生の存立を価値あるものとして捉える為の思索を続けてきた。それは、存在の根底からの人間福祉学ないし社会福祉学の解明としての考察であった⁽²⁾。今回ここに稿を改め、これまでの特にプロセス哲学をはじめとした論理展開と人間福祉の施策上の試みをより密接に連続させ、福祉論の概要全体との連関の元に、福祉形成が人間の[・]一たる存立の[・]全[・]ての[・]基礎として必須であり、あるべくしてある世界の存続秩序の基底となりうることに関する考察方途の見定めをこの稿における目途としたい。ことさら本稿の始めの数章においては、「人間福祉学と人格論」の構造論的側面を簡潔に纏め、人間存在の永続における条件形成の最初の土台たる基礎論理とし、それが人間の[・]一たる存在を支え続ける第一歩たることを説くことにしたい。本章では、人間福祉施策の概括を通じて人間の[・]一たる存立条件整備を明示することから始めたい。

まず、福祉施策の理念と構造に視点を注ぐ。それに応える為には、人間の存在における価値をどのように位置づけるかを問うことが緊要となる。

近代以降の生活上の問題を抱える人々への施策や実践対応からの歩みに、顕著な施策上の進展が見られる時期があった。その時点における問題対応的な論理的な位置づけとしては、ドイツ流の社会政策論を取り上げることができる。そこでは、生活問題が労働問題に即して課題となる。それは、人間の労働力としての存在への対応であり、人間への社会的対応が、労働力保持の為の政策であったという見解に集約することができる⁽³⁾。各時代における個人の社会的存在に関してみると、その社会内において必要とされるなんらかの有用な労働力を担いようかどうかでその存在の価値的位置づけを判定する側面があった。さらに唯物論者がいうように労働力の「保全培養」とされる方途が存在価値の判定に関わってくることによって、労働を担う個人及び家族の存立についての価値判断がなされてゆくことになる。これはあくまでも労働力の担い手として、一定の労働社会において認可されうる範囲内における一般性を持った判定基準であった。時代的制約のなかで、労働力を担い得ないとされた人々の個別的・集団的存在は、悲惨な状況のなかに取り残されることを如何ともし難く、多くの人々は労働力の範疇から区分され存在判定される状況が堅固に存在した。このような議論は現代世界の人権論が行き渡っている（少なくとも先進国と自負する国々において）現実のなかでは持ち出すこと自体が意味をなさないといわれるかもしれない。近代以降、次第に、社会的な運動的営みの力をも加わり、現代世界においては人権の重視が通念であるとされているはずである。しかし、ここでこの論点を再吟味すべく解明課題とするのは、未だ生き辛さを抱える人々が、その労働をは

じめとした能力論のなかに取り残され、人間の一たる存在としての価値づけを獲得するに至っていないからである。ことさら現代において社会的政治的経済的判断は状況のなかで揺れ、近代以前にさえ落ち込むとさえ見えることもある。その人間の存在価値を推し量る基準論を根底的に問う必然性がここにある。その根底にはどのような価値基準が存在するのであろうか。これを問う必要がある。

ホワイトヘッドの言説によると、存在の根底といえる「現実的實在」が一たる存立を達成するプロセスという表現で存在価値への道が説明されている。それは決して定型化されることのない流動的な可能性が前方の統合性によっていくなればその主体としての働きによって『『抱握』ないし『我有化』（ホワイトヘッド）され客体としての一を確実化すると同時に一として前方に受け止められていく』というプロセスが完遂されていく。それは未だプロセスであり、前方への歩みの一步に過ぎないもののその客体化により一たる内実の受け継ぎがなされ、前方のさらなる延長に資する作用が作動していく⁽⁴⁾。そこにおいては、一たる個の内包する流動性のなかで形作ることができる価値の発動がなされている。その価値とは、他稿で述べてきた全体の統合性への動態を可能とする、しかも愛という価値基準を持って可能としていくという内実を持つ⁽⁵⁾。それは人間の価値世界においては様々な表現でまた作用的意味を持って説述される可能性ということができる。それは永続的作用価値への貢献を第一に求められるであろうが、しかし、それは一たる個の内実としてしか表現できないものでもある。そこにある内実たる個、そこには無から有に至るまでの距離がある。そこには内実を流動性のなかから生み出していく一への道筋があるのみであり、これはこれという形が予定されてあるのではない。したがって、前方から「抱握」（我有化）の作用として関わる主体の包摂が、創られていく無から有へと続く動態へどのような言葉で語りかけていくかという内容次第で個としての存立が左右されていく。それは、「愛としての統合作用」という作用動態の選別によるとしても、それが一たる個への道程にある流動性と関わりを持つときには、そこにある存在そのものの持つ愛ある統合性との融合可能な要素の内的成就から一への道がどのように作用化されていくか次第であるとしきということができない。それは限られた全体を前提にする物的、時間的次元から、次第に内的充実度の高い内容へと変転していく。

根底にある存在に関する価値基準を問うてきたが、このような根底性を持って人間の存在価値が問われていくことが（なさるべくして）なされていない現実が世界のあらゆる地域で引き続く事態としてある。その前近代的とさえいうべき人間観ないし価値づけに欠けているのは、制度的社会基準の未熟さであるといえる。前述の労働力基準もそうした遅れた社会基準の一つとして時代的制約の元に受け入れられていたものであった。これは上述のように近代以降の経済社会に顕著な基準であったが、さらに遡（さかのぼ）ってみていくならば、身分制度による基準値の低さにより差別を如何ともし難く、さらに宗教的根底による基準値の設定、さらに現代に近接してみると、「大多数の最大幸福」等の一定の幸福基準も取り上げねばなるまい。さらに基準値についての考察

をしていくと、厚生（福祉）基準等を網羅的に見るときにその特性が浮き彫りになる。それは客観的基準を求めながらも、しかし、その進行のなかで客観性から遠くなっていると思えない事態に陥っている。現代においてもよく用いられる「パレート最適基準」にして然りである⁽⁶⁾。

2 厚生（福祉）基準論の段階的高揚についての考察

少しく、厚生（福祉）基準に関する議論の道程を辿っておこう。その生誕期におけるピグーによる厚生基準をまず取り上げておくべきであろう。それは、「人の享受する福祉の社会的総和を最大化する」という基準であった。この議論がベンサム功利主義原理にその基礎を置く内容であることはいままでもない。この議論における個人間効用比較の不可能性故の、客観的比較の困難が問われ、その後の学的努力が続けられる。われわれはここでリトル（Little, L.M.D.）の厚生基準に言及する。リトルは、「個人間効用比較とはいっても各種各様な個々人の満足と比較していく必要はなく、ただ貨幣一単位がどの程度一般化された個人的な効用増大に貢献するかを調べてゆけばよい」とする。このリトル基準といえる内容は、政策決定における有効性を発揮し、「パレート最適基準」の達成を助けるものとなる⁽⁷⁾。次に「社会的厚生関数」にも触れておく。バーグソン＝サムエルソンによるこの厚生理解は、「社会的選考順序」の経済分野における整序を目的とする。しかし、それは厚生に関する政策領域を独立した形で扱い、整序をなすことにより、政策決定を容易にしようとするという意味を持つものであったといえよう⁽⁸⁾。これに対して、アロウ（Arrow, Kenneth, J.）は、所得分配についての全体的な順位形成が前提になるとして、解は皆が同意する内容領域に限られるか、或は独裁的な決定に皆が従うことになるかどうかという限定を考える以外には成立しないことを指摘した（一般可能性定理）。アロウによって完全な民主的決定は不可能であるとされるが注記のようないくつかの例外はあるとされよう⁽⁹⁾。この章の暫定的結論へ至る為に、これまでの基準論の最後としてルーゼンバーク（Rothenberg, J.）の厚生基準に関する考察に触れておく。議論の詳細にここで触れることはしないが、ルーゼンバークは、制度内における意思決定という一定の枠組みを前提にして、そこで公的な意志が示され、合意をとる努力がなされ、これを上述の言葉を用いれば、社会厚生関数として、決定へと至る。このプロセスをたどることは、社会構成員の協働同意の形成としてみなしう故に、アロウの見解は問題にならないといえる。しかしこのプロセスは、前提されている民主主義過程を想定するに過ぎず、現行の状況内の決定における公共性、政治的決断、政治力の関与等の流動的関与に左右され、結局は現状維持を許容するに過ぎない議論でしかないといえる。このような価値基準論は、結局ルーゼンバークの説述におけるように、現状の決定過程に戻り、そこにおける価値設定の問題に直面することになる⁽¹⁰⁾。強いていえば、この基準論の成果としては、全ての一個人間の満足や取得価値を比較検討して整合性の一致を探るのではなく、全ての人の一たる存立を同一の価値ある存在であるとして、生命の価値存在の平等を確実化してい

くことを最終目標とし今ある状況に対する最大限の目標近接を指向するという道程が基底的前提として考えられる、ということになろう。一たる価値の存在性の現在時点における最大限の実現への道が絶えず探られることが求められるのみであろう。とすれば、いかなる内実をもってそれが定立されればよいのであろうか。さてわれわれは、この章の結論部分としてアマルティア・センの「潜在能力説」を取り上げる。まずセンによるアロウの可能性定理への見解を見ておくことにしよう。彼はアロウの定理を「効用主義」と貧弱な効用情報の組み合わせによって成立したとし、それを打破する為には、効用情報を豊かにすることがなされるならば、その克服も可能となると考えている⁽¹¹⁾。このような効用主義の限定性を認識しながらルーゼンバークのというような民主主義に即した機構的改善を図るプロセスの有効性を追うときに、アマルティア・センのこのような効用や効率に関する議論、さらに彼の人それぞれの可能性の開花という方向の元に一人一人の存在の価値に肉薄していこうとする「潜在能力説」は基準論の考察に対してわれわれの視点に添う在り方を教示してくれる。センは、「分配の在り方を考慮しないで効用の統計値を最大化しようとする在り方」を功利主義としている。この功利主義とは「効用主義の特別な事例」であるとされる。このように捉えると、人間社会の基準値の一般としての効用主義はわれわれの社会規範でもあるといわざるを得ないのであろうか、それを改善する方途とはいかなるものであるものであろうか。センは経済学という特定化された領域ではあるが、そこにおける特性からその効用主義等の改善を説こうとしている。「現代厚生経済学の典型的な主張は、自己利益の最大化行動と、効用に基づく基準で測った社会的成果の双方から引き出され」ている。この効用に関して、その個人間比較が放棄されるということになると、そこに残されるのはパレート最適基準ということになる。それは周知の「個人の効用を減らすことなく誰の効用をも増やせない社会状態」が存在するならば、それが「最適」であるとするものである⁽¹²⁾。

しかし、センは、これを完全否定することはないものの、この効用では人間の生の価値を推し量ることができなとし、これに対して、「目標、責任、価値等を形成する能力を持つエージェンシの側面」を挙げ、その面からも見るべきとする。さらにいうと、人間自らを「自己が価値あるとする責任主体」であるという側面からみるという基準値であるといえる。さらにセンは、効用的観点から見た厚生（福祉）とエージェンシを比較し、後者の方が「行為者としての人に一層の注意を払う」と、人間が自らの為に獲得したことよりも、そこに有する自由に着目し、その主体的側面を強調している、そこには、人が持つ自己の価値の発揚による自己実現の道とともに、限りなく全ての人間存在の能力発揮へと近接していくことの価値、センのいう「潜在能力平等説」の説き証へと展開する議論を見出すことができる⁽¹³⁾。

さらにセンは、このエージェンシとともに、「善き生」へとコミットメントしていく態度を最広義の福祉のなかに位置づけているとわれわれは理解している。即ち、価値判断の主観＝主体性の承認と価値状況の評価の客観＝相互主観性を両立させようとする考え方が内在している。われわれ

の視点からする相互人格主体への道がここには見られる。このエージェンシー、さらにその概念を一層精神性の高い内容とするコミットメントの概念は、対象化できる自我領域から人間主体の根源としての「人格」主体における統合作用との連結の場において中心的なかつ包括的な役割を果たすのである⁽¹⁴⁾。

こうして、われわれはセンの基準論のなかに、これまでの基準論がその基準価値の作用を十分に果たすことができなかつた限界を超え、先に示したホワイトヘッドもいう人間の「一たる」に値する存立への道を指し示す前方の統合性へと断絶なく続くことのできる方途への歩みを見出すことができる。

前述の根底的基準論に帰り、人間の可能性を問い続けることの有意義性を重視していく。

そこに一人の人が生きている、その生命の価値においてその人の持てる力の有意義なる発揮を求めその人が生きる条件の整序要件を探し、一への道に立つことができる立ち位置を求め実現していく。そのなかにおいて世界の存在延長も保持されていく。

ここには人間存在における「永遠的客体」の選別というホワイトヘッドのいう選別基準が適用される。それは延長への道における客体化の先端部分の基準となる。彼の表現をもってするならば、「主体的諸形式への未決定部分の除去」、ということになる⁽¹⁵⁾。一たる個の主体への包摂にあたって、個の全体の客体化における主体への包摂即ち抱握（我有化ないし占有化）を困難とする未だ乗り越えられていない諸側面がここにいう未決定部分と理解されるであろうが、これを細部にわたって除去する対象化可能領域における実践行為が不可欠であり、この諸点の克服によって、選別される個としての存在保持がなされることになる。われわれのいう個の価値の全面的表出への道がここに問われその未決定部分が確実に除去されていくことが求められる。これは当然、終極における愛の統合原理に照合されることになるがそこへ至るまでの主体への包摂を妨げる要因除去がなされてゆかねばならない。こうして愛の統合基準へ向かう決定要因という基準がここに明示されることになる。このように考えを進めるときに、アマルティア・センのエージェンシーやコミットメントの議論は、その位置を延長へと進める連結項として重要性を持つ。

ここで人格論を簡潔に当章内で触れておく必要があるが、詳しくは拙著「相互的人格主義」を参照されたい。概要の範囲ではあるが、後章の何カ所かにわたり議論の流れに添って記述しているので、それを参照されたい⁽¹⁶⁾。

3 人間福祉的实践と抱握から延長、そして全体への道

前章の基準論を軸にした議論に続き、そこに述べた福祉性が全体への道に添い有機体的世界を築く論理的核となることについて述べておく。この章では、特にプロセス哲学と福祉論を一層緊密に結びつけていく作業を高度化させていく。その議論のなかで、シェーラーのいう対象化できる自我

論上の諸事と対象化できない主体領域たる人格論の相互性による両立を明確にすることに焦点を絞るべく、ホワイトヘッド流の両極論とその両立、さらに相互包摂を簡潔に述べて延長論を定立する課題に応えることにする。

ホワイトヘッドのプロセス哲学については、複数の拙稿において詳細に触れてきたが、彼は有機体的世界の全体を指し示すにあたって、量子論的世界観の元にそれを表現している。したがって量子的次元で捉えるときに世界の全ては、空間的であるとともに時間的である。そうして粒子的かつ波動的である。そのことをもっともよく表現している全体についてのホワイトヘッドの説述によると、全体への道をたどればたどるほど、「細部が少なくなり、全体的なものが多くなっている」という。この表現は、動向の契機における主体的経験について述べられていると理解できる⁽¹⁷⁾。ここにいう経験とは、「永続するもののうちの一要素として、そして宇宙の永続的な構成要素を自らのうちで体现するものとして、実現される」。これは「必ずしも意識を含むことがなく、そこには高められた主体的強調を含んでいる」とされる。ここにある「経験のより高次相」は、「広さの次元を増幅し、より高次のタイプの諸コントラストを催起する」。「物理学では」ここにあるような「伝達の在り方は」「粒子的とも、あるいは波動的ともみなすことができる」。ここに明瞭であるように、述べられている全体とは、量子論的世界観に基づくそれであり。まさしくホワイトヘッドのいう「現実的實在」の作用態の動向そのものである。人間存在においては、この世界との接触は物的経験として一般的に捉えることができる。それは原初的形式を持つと理解されよう。なんらかの「契機で感じられたものとして受容され、主体的情緒として順応的に我有化された情緒」とされる。それは「彼方の世界との関連において感じられた情緒的感じ」ともされる。これは「ベクトルの感じ」であり、「決定されている彼方から感じ、決定されるべき彼方を指し示す感じである」。ホワイトヘッドは、このあるべくしてあるものとは決して物的世界から見てもあるべくしてあるものではない。それは物的世界における諸契機たる社会から導きだされることはない⁽¹⁸⁾。その複雑な社会環境の全体を抱握する彼方の統合性との関連において存立する、としている。彼は、これを「全的に生きている結合体」とみなしている。しかしこれには、結合体が主体的である場合のみそういうものという但し書きがついている。ここでも主体を真の主体たらしめる彼方からの統合性が前提にされていることに留意する必要がある⁽¹⁹⁾。このように見てくると高揚の高度化に添うと、次第に複雑な細部はその位置づけを或は意味付けを小さくしていき、全体性に関わる側面のなかに包摂されていくことが明瞭になる。強いていえば物的現実の存立体は、我有化の現実のなかで神の永続生と愛のなかに統合されていくことになる。

ここに愛という形をとる神の永続性の根幹をわれわれはより一層知らされるのであるが、これによって、物的世界の統合性の根幹が示されることになる。それは唯物論的機械論ではなく、その世界の物質極とともに心的極を有することの証明がここになされていることに気づかされる。物的かつ心的両極性の存在様態のなかに世界が在ることにより世界の永続性がまさに許されてあるといえ

る。そこにある物的極、心的極の包括体たる全体が愛という統合性の根幹において、その絶対において世界の存在を許していくことになるのである。このように見ていくと、前章で検証的に触れたアマルティア・センのエージェンシーやコミットメントに内在する価値基準がこの統合性へ至ろうとする愛の対象化される領域から対象化を不可とする領域の両者を融合させ、さらに両立へと導くことのできる内容であることを知る事ができるであろう。この議論は拙著のなかにおいて記述したように⁽²⁰⁾、対象化の範囲内にある自我論と主体としての存立体である人格についての論という二元的であるとされることの多かった議論を、ホワイトヘッドの議論に照らして想起するときに、まさしく自我という客体化されうる領域と人格主体という客体化されることのない主体領域という、両極としてみなされる二極を両立させているとして捉えることができる。またそこに延長性を持つ永続領域であるとしてすることができる愛の統合領域を指し示し得るといえるのである。こうして自我という客体化され一となる為の人間世界の制度、施策、技術、根底的には理念による整序により主体領域からそれを我有化し、即ち抱握されるという道が完遂されてゆく。

われわれはこのことをより明瞭にする為に、これまでの稿においても触れた意識や知覚論をホワイトヘッド及びその研究者の理解を元に考察していく。ホワイトヘッドが意識に先立つ経験を重視していることはこれまでも度々他稿の議論のなかで述べてきた。その経験の主体となるのは、先立つものによって限定される「現実的実在」である。この現実的実在は彼方にあるものによって目的的に限定されるとホワイトヘッドはいう。したがって彼方の統合力ないし統合主体を含む全体がそこに多様な現実態様を持って特殊的にないし無限の多様性を持って存立していき、この現実的実在のなんらかの結合体が経験主体となり、感じの為の誘因となる命題を形作る。こうして経験が命題という形で表現されることになる。かくして命題的感じが判断へと至ることになり、それが知識へとたどり着くことになる。このように見ていくと知性に先立つ感じ、ないし情緒的状況の連続とそこに生じる目的性の流動化のなかで知覚は育成されていく。したがってデカルトやカントの認識論は、この感じや情緒的世界を切り捨てるという即断に終わっており、育った知覚の作動にあまりに比重を置きすぎているといわざるを得ない⁽²¹⁾。それは近代以降のある段階までの人間の知性を捉えていたかに思えたが、その歴史的制約のなかでのみいえることであり、決してわれわれの生きる世界全体を時間的空間的に総合的に捉えきれていなかったといえよう。近代から現代に至る知性に依拠するとともに、それに拘束されることのない指向性を持ち、永続を許容できる道へと至る努力を、今この時代においてはなさねばならない。その態様には人間の感じの次元を含めた全体的指向を統合力の根幹の愛に至りつつその連動の元になしていくことが不可欠である。

こうして全体においてはその細部が愛という全体性の統合力のなかに統括され、次第に細部よりも全体性が重視されるという道が描かれることになる。もしその道を外れることがあれば、世界はその歩みに断絶や崩壊等を招く。或は終極の時を迎えることになる。その道を愛によって矯正し続けるというごくありふれた道のみが永続を支えていく。それによってのみ延長的連続態について語

ることができる。

人間福祉の施策連続は、この道の延長線上に位置づけられていく愛の実践に他ならない。それは存在の全てがその存在の持てる価値を発揚できる道に立ちうる条件の下に置かれるときにプロセスのなかに位置を有することができ、それが全体統合に資するなんらかの価値づけをそこに持ちうることの明白さをもって延長が確実視されていく。

4 Process Goal の道をたどりゆく人間の生

以上見てきた人間の生を捉えてゆく議論の流れは、その道筋を検証すると静態のプロセス論としてしか目に映じてこない。それがプロセスゴールを経て人間の生の連続へと歩みゆく。プロセスはなんらかの目途と、目途達成に至ることのできない今における目途から見た不完全さのなかに成立している。そのプロセスを無限大の延長の拡大の元において捉えるときに、しかも流動性を持つ多様な動きをも内在させて捉えるとき、それは、線で把握しきれない動的渦巻きとして始めと終わりの混在さえも包摂する力動的全体のなかで捉えられる。プロセス、プロセスゴールという表現が意味する前後の推移を前提にする永続する現実態とは、量子に言及して述べたように時間的かつ空間的であり、粒子的かつ波動的であるのであり、その流動的な態様にその特性を見出すことができる。しかし、そうしたプロセスでありながらそこには統合性への道がたとえ流動性のなかにあったとしても想定可能である。ここに全体と延長論が混在しながらも統合へ向かう道程が描かれる。その動勢のなかに人間の生は置かれているのである。したがって、人間の生とは、直線的に成長していくものではなく、流動性と多様な内実包摂されながら、各様の総合的全体として全体のなかで内実の一部たる個としての総合性への高揚を果たしていく。それは関わり合いの様態における高揚であり、目途たる全体統合の存立という彼方の存立との対比において想定のなかに見出すことができるのみである。しかし、それは、複雑に絡まり合う現実的實在が形作る意味として存在するということであれば、その實在を明確な想定の元で位置づけることができるであろう。先に示したように、現実的實在とは、前方の存在によって、即ち究極から満ちあふれ全体を覆う愛としての神の作用たる統合性によって因果的に限定された経験主体という意味付けを持つ存立態であり、それは生命の躍動性という視点をもって把握される人間における命の有様のなかに最もその本源性を見出すことができる。少なくとも、われわれの知るかぎりの経験のなかでそれは真とされる。なぜならば、人間は絶対に対応する意味をその経験のなかから引き出すことができ、その光に照合した意味へとその意味を純化していく力を持つからである。その一たる力は限定的であろうとも、その延長の連続によるプロセスをたどっていくことができる。それは、絶えずおぼろげな感じから発し、一たる存在性へ至り、その永遠的客体化を経て、さらなる高度化をたどりゆき、自らを高揚させ、プロセスを歩んでゆくことができる。そのプロセスゴールが、全体のなかの絶対との関わりという到達不可

の彼方の前方との連続性によって自らを位置づけ続ける。生命とはそのような存立態である故にプロセスゴールを通じて絶対と関わりつつ存立を許されてゆく、そうした存在態様であり、それ故に、究極にも確実にある現実的実在という存在態様の本源たる存立体との連続体とみなしうるのである。そうした生命、即ち現実的実在という経験主体の構成態様を意味的に存立させる主体構成軸が、かくのごとく明示されるのであるのならば、この生命、特に存在価値ないし存在の意味へと近接をなし得る生命たる人間生命をどのようにしてその存立のなかに位置づけていくかが自然の流れのなかで自ずと問題にされざるを得ないのである。われわれは人間存在における生命の基盤条件を人全てにわたって創り上げていく福祉の道を論じてきたのであるが、この生命基盤を位置づけ、その存在の可能性への道をたどる条件整序から確立への道を、人間の為といわずこの世界の存続の為の統合性しかも愛としての統合性への奉仕としてなし続けていく存在命題として堅持し続けることを絶対的使命としている。それが延長の土台となっていくときに、その延長は永続性を保持することになる。しかしその永続性は、決して自動的なものではなく人間が人間の為に作り出していく土台たる条件によって可能になってゆくのではなく、その条件そのものを生み出すことを存在要件とする愛としての統合性による作用がまさに全体のなかに原初的にあり、結果的に発揚されるという神の働きかけ故にそこには神によって与えられる存在の許しがあるということによってあり得るものとなるのである。この許しへの応答としての生命の生かされる条件整序があるかぎり延長は継続され、人間世界は神のいたもう全体のなかに包摂され、神の永続とともにあることができる。人間にとっては絶えずプロセスゴール達成の連続としての延長である。神はその一瞬一瞬のなかで人間の一たる存在のそれぞれを束ね、全体の愛としての意味のなかでその延長の為に作用化させていく⁽²²⁾。

5 一たる存立の相互性基盤としての福祉；理念，構造，作用

これまでの議論を特に人間社会に焦点を当てながら、生きる現状の動態においてそこにある理念、構造、作用について、現実的実在の個的集約たる一存立体が相互的に形作る延長について、有機体の哲学をベースにして述べていく。それは前各章の議論をさらに深める現実的かつ実践理論的な位置づけをも持つことになる。

1, 2, 3の各章において述べた人間福祉の広義における行為展開とそれによって生み出される作用連続、及びその学的把握としての人間福祉学の展開は、4章において述べた延長プロセスを形作っていく要となる。そこにおいて生命の存続が許され、生の連続が一瞬一瞬の存続を一たる現実的実在の個的人間存在の総体において相互集約させていく可能性が与えられていく。

しかし、このことはホワイトヘッドのいう存続と神の許しを絶えず受容し受け止め作用化することを要件としていく。そのためには人間福祉という人間における存在価値の条件整備を発揚させて生きる人間の福祉内容における理念、構造、また作用の在り方が高度化しつつ問われ続けることを

さらなる要件とする。

まずは理念段階においては、いかなる内容が要件となるのであろうか。それに応える為には、われわれが主張する人間の存在価値の価値づけという内容について福祉性に即してさらに触れることを必要とする、

「存在価値」とは人間の個的存在がその存在のままにその高揚の条件たる持てる固有の条件の可能性に即した対応がなされ、自らの個的発揚をなし続ける真の道筋が与えられる状況を意味する。そこでは当初における優劣の選別がなくそれぞれの持てる可能性に応じた高揚への道が整序されつつ用意されていく。それは人間の持てる能力の全人的発揮への帰還（recovery）であるともいえる⁽²³⁾。このように表現すると、効率論者は人間存在にはその生存の当初において選別があり、高揚力の強いものに対して順次、有効な能力高揚を図る優位性が認められるべきであると主張するであろうが、それは人間の能力に対する、極めて狭い見解に過ぎないという他はない。そうした見方は、現実内における今あるごく狭隘な行為上の能力発揮に留まる可能性をのみ視座のなかに捉えているにすぎない。今ある目で捉えうる効率高揚ないしその能力は、その現実構造に遮られていることを忘れるべきではない。そこにある能力においてその現状内でマイナスとしてしか見えない状況を超克したところにある力を含み、様々な力や可能性の探査・究明とその作用化が進められることがあってはじめて一たる個の本当の存在価値を花開かせる道が定立できるのである⁽²⁴⁾。それは上記した言葉を用いると、その一存在の有する価値への帰還（recovery）そのものである。それによって、真のエンパワメントないしストレングスへの道が、決して線的ではなく流動性のプロセスを要するが、そのなかにおける開示がなされるのであり、それはこれまでの福祉目的のなかで絶えず求められ、実際の行為展開がなされてきたところである。したがって、ここにいる存在価値への道はそのエンパワメントを真に実現しようとする在り方に他ならない。こうして理念における存在価値の重視は、その人における個的存在の一たる存立の全てにおける（それを内的に外的に取り巻いている）構造に及ぶことになる。この構造が理念に即した機能内容を十分に作用化することが課題となる。

存在価値を理念とした福祉の発端部分について述べてきたが、これは当初における具体世界では第1章において述べた長きにわたる歩みがたどられ、そこに人権論に基づく人間に対する思索が開始されていくプロセスがあった。それは、人間に対する思索、つまり人間を対象化することによって生み出される対応プロセス内容であった。これは、いわば対象化行動の前進としてしかみなすことができないが、それでもそれは人間の存在価値への重要なステップでもあった。人権を保持しそれが充足されているかどうか、ともかくその人ないし人々の置かれた状況を対象（特にここではシェーラー流に「物化的対象化」といえるであろうが）として推し測っていくことによって明らかにされていく人間の物化状況でしかなくとも、その人権充足があるか否かという問いがなされ、ともかく置かれた条件状況に応じることになる。その判断が左右される内的外的条件が絶えず問われ

ていかなければならないが、それは今そこにある流動的な条件によって左右されることになる。客観的とされる条件はその限界を露とし、それを越えた判断は彼方からしか訪れない。彼方から示される理念に照らされた「存在価値」に基づくことによってしかその判断は正当性を持つことがない⁽²⁵⁾。そこからの強力な価値性に基づく仮説としての論によって今が図られ今の施策が吟味される以外に道はない。こうして現実事象の限界についての意識化とともにその方向性が示されるときになんらかの施策上の対応があくまでも仮の姿をもって構造化されていくことになる。このひとつが始めにおいては労働力の保持如何という判断基準でもあったのであろうが、次第にその基準に平等基準が挿入されていき、それは次第に一般性を持つようになっていく。その一般化は、次第に制度構造を伴うようになっていくが、それとともにそれを、当初においては補うという意味を持ち、次第にその補い故に足らざるを明確にするという役割を果たし、その足らざるを制度上の構造に付加し位置づけ、堅固化していくとともに、人間の全てにわたる存在基盤、即ち一たるその人の存在価値における発揚の条件整序に資するような条件設定から構造上の有様を探りさらにその客体化（客観化）へと至ることになる。それは構造枠であることを免れ得ないが、そのような人間存在の有様がノーマライズされるなかで、それは文化化されるようになっていく、即ちそれがわれわれの位置づける福祉の常態作用化に他ならない。その作用化は、福祉が生活の流れの一部としてしっかりと根付くことを意味し、一たる存在価値に至る一としての客体化、ホワイトヘッド流にいうならば「永遠的客体」化していくことになる。

この作用化からの連続的前進は様々の要件を必須とする。それは作用の流れのなかにボランティアなセクターを内包し、それが共にあるセクターとしての広がり構成し、公私の相互協働たる中間セクターとしての独自性を保持するように成長を遂げる⁽²⁶⁾。このセクターの発揚的広がりとは、構造が形にのみ偏ることなく、構造と連動し機能が、構造の束縛から離れ独自性を持って構造のなかにあった理念をより実質的に抽出した作用となって溢れ出す、その発揚を意味する。これは共生理念の文化化そのものであるといえる⁽²⁷⁾。そうはいっても文化も社会に位置しそれは構造を持つ。しかしそれは全体社会から地域社会へ、さらにより血脈の通う小地域社会へとその広さ大きさを繊細なものとしていく。それは人間の関係性をどのように創り上げてゆくかに関わり、構造内関係性から作用そのものへと変化を遂げる。それは人間のニーズ充足から充足の高度化を含み、そのニーズへの対応のなかに統合性への歩みの基礎があるということが、またその根幹に愛があるということが行為の見定めのみならず明らかにされてゆくことが必須となる。目指されるのは、一たる個の延長の客体化への道がどのように辿られるか、即ち抱握がどのように可能になっていくかに掛かる。

それは上に述べた中間セクターの構造が作用との連動のなかでどのように形成され続けられるかに関わる。それは公的セクターから私的セクターに至るまでの間にいかなる態様があり得るかに関わってくる。それは政治的次元における共セクター、経済的次元の共セクター、社会的次元の共セクターと区分してみた方が理解し易いであろう⁽²⁸⁾。政治的次元、経済的次元、社会的次元におけ

る公・共・私を下図のように位置づけ、各次元における三者それぞれの決定をその拮抗する点に捉えることができ、その三者の拮抗点の総合化をもって決定段階を見出すことができる。

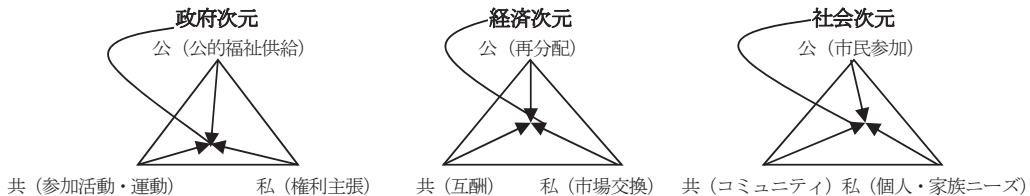


図1-個のニーズと相互規定関係図

[拙著「相互的人格主義Ⅰ」(図5-5)より。]

上記のように、その構造を単純化して記述するならば、それは政治、経済、社会における各セクター内においてどのように公・共・私が調和点をもたらしていくか、そこにどのようにそれぞれ、またそれぞれが絡まる相互性が定立されるかについて問うことができる。厚生経済学を用いてその基準論を論じたおりに触れたように、独裁的決定がないことを前提にするならば、そこには個的存在の可能性に応じた決定参与があり、しかしその基準点においてはいつもその個々における潜在性を含む能力の発揮が探られ、求められていくことになるという原則が関わっていく。

この作用が順調に作動し、作用が継続されてゆく為には上述の個々が関わり合いのなかでの生命の存続さらにその良好な存続という共同かつ協働の作用を果たし合う為の要件としての中間セクターが順調な営みを保持し作用化されてゆかねばならない。

これはその内にエージェンシーとコミットメントの行動基準を内包したボランタリィ・セクターともいえる存在性とその実践性の明示にも繋がる。この政治・経済・社会における三つのセクターの内部をそれぞれに究明しさらにその関係性を見極めてゆくときに、われわれの世界における構造上のいわば見える範囲の環境の側面が前方指向性を堅固化し、確実化されることになる。その解明の手掛かりとして、上述したように、それぞれの構造を公・共・私に分けて考えてゆくことができる。政治セクターにおける公共私、経済セクターにおける公共私、社会セクターにおける公共私という類別とともにその流動的態様を明らかにしてゆくことにより各セクターの具体的関わりが理解できる⁽²⁹⁾。下図は、さらにその内実に踏み込む為に、地域レベルにおける公・共・私が生ずる福祉供給決定次元が個的ニーズの次元の個的存在へとどのように関わるかを概要図式化している。

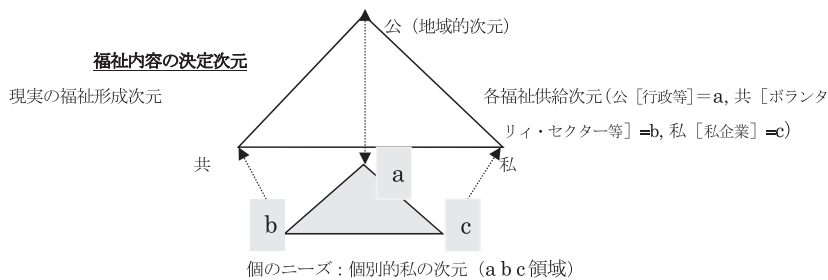


図2-各福祉供給主体と個のニーズ：個別的私の次元

〔拙著「相互的人格主義」（図5-6より）〕

ボランタリィ・セクターに至り中間セクターの働きは、公セクター、私セクターを交えて作用化していく。まさに土台としての各セクターが福祉性という指向の統合性が作用化されていくなかで営みを前方に向かって延長していき、前方からの抱握の営みに対し主体的統合を果たしていく。その作用配置の存立における統合集約体の構造態様上の進展を経て、作用の構造態様化を生み出すことになる。この構造とはあくまで固定したものではなく態様という表現に示されるように作用の流動性と多様性を内包しつつ連動する性向を持つ。

6 土台が作用化し、作用が土台を作り、生命プロセスが築かれていく

土台たる構造態様が作用を生み出し、さらにその作用が新たな構造態様を生み出し、それが繰り返されていくが、そうした全体としての様態の連続は、全体という構造化できない作用の内実における永続性のなかで抱握を通じて包摂され続け、延長と永続における存在の本源としての統合性へと導かれていく。この動態を、①構造態様に即する公共性という此方からの歩み出しとして理解する。また②その公共性の連続態様が、永続する全体的な社会的統合性として、彼方からの動態に融合し連動していく。最後に③その総合作用の要として統合作用の総体における軸芯たる総体人格さらに秘奥人格に至る愛について触れて結びとしたい。①についてはこの章において、②を次章において、③は結びの項を設定し述べていく。

一たる存立が公共性への収束を可能とするときに、そこでは生命プロセスの秩序が各様に形作られていく。個・共同の同時存在、或は個・協働の存立、そのなかにおける個の価値発揮の個的ならびに集約的存立が可能性を帯びる。こうして自我論的存在構造における共セクター的土台が築かれていく。そうして人格上の存立への道が自我領域と緊密に関係するなかで始まっていく。もっとも人格領域に近接する方向づけにあたっては、個的人格及び社会的人格ないし総体人格が挙げられる。それは社会性を体現した個々人の主体的存立であり、T. H. マーシャル流にいうシティズンシップ、即ち義務と責任の調和的主体の存立、及びわれわれの視点からする人間の個的価値の平等な表出を

可能とする人格許容状況とそこにおける人格各層があり、公共性に関するホワイトヘッドに関わる論に近い内容を持つといえる⁽³⁰⁾。さらなる人格の高度化によって、個的、社会的人格を越えてゆくとシェーラーのいう「秘奥人格」に達する。この議論については結びにおける課題としよう。

まず自我領域の個と共同ないし協働を見ておこう、これは相互に対象化できる人間の関係領域に様態ないし事象として捉えうる。相互の対象化のなかに調和点を探る行為があり、そこにどの程度、私性と他との各個の利益を調整すれば相互に存立が可能かについての回答が与えられる。それは、自利性ないし自己主義と利他主義との離反状況をどのように克服するのかという課題のみがそこにあるとしか見えないのであるが、それは前述したエージェンシーやコミットメントの議論のなかでも見たように、相互に形作る、例えば中間セクター（共セクター）というような自己の充足と他の欲するところの充足を前方からの統合性への融合の営みとして、しかも相互的な価値充足の道に立つというような道程を探り形作るときにその充足が可能になっていく。それは生命の営みの充足が極めて困難な一人のその課題解決を図るなかで、包括的な充足という克服への道が見出されていくというようなプロセスのなかに具体例を見い出すことができる。人それぞれの充足への平等な道を探る営みは、単なる自己充足でもなく、単なる自己犠牲でもなく極めて総合的な公共的充足の道への歩みをわれわれに教示してくれるのである。

このような比較的に捉えうる関係領域の調整によって成立が許容される領域がここにある。この相互調整の有様においても、われわれの議論の基軸としている一たる存立を求めるかぎりにおいては、単なる現状維持的な存立のみならず、存在の価値の高揚の発揮をさらなる存在軸として捉えてゆかねばならない、そのためには個の対象化できる範囲の自己発揚と高度化が課題となる。そこには対象化できる範囲においてではあるが、実験心理学等の個的能力の把握と発揮の条件を探るという実践行為を伴って進められていく過程がある。こうしたプロセスは、いずれも此方からの進行過程であり、ここで途切れるかぎりにおいて、人間及びそれを取り巻く環境世界の前進はその進行を内なる一定限度の領域においてしか可能とさせてゆくことができない。この限界を打破することができる方途としてわれわれがこれまで取り上げてきたのが、ホワイトヘッド等が主張する両極性の論理に基づく内容である。それは此方からの方途や流れの道筋とともに彼方からの方途と流れを同時に或は相互的に捉えようとする。そこには両極性の両立が存在する。これは両極の役割がそれぞれの意味の進行において、全体に作用する統合作用の元に高揚を果たしていき、役割の意味的両立が可能になっていくことを示す。それは高揚を前提にした役割上の両立である。われわれにとってここで重要なのは、シェーラー流の議論では捉えきれず二元論としか見えなかった二律の状況がこうして合成を経て両極の両立と捉えうる世界状況として姿を現すことになるということである。したがって、上述したような一人の深刻な生き辛さのなかにある人が内なる力に目覚めその発揚条件を明確に捉え、潜在力を含む高揚的価値発揮の道へと進もうとする、即ち一たる個の発揚的歩みのなかに明確にあることは、またその条件成就を果たしていく平等性への営みは、自我と人格にお

ける両極の両立の先導としての道に他ならないのである。

したがってシェーラーのいう人格という対象化できない領域たる主体の領域が、このホワイトヘッドの両極論によって、対象化され一たる客体となって次なる彼方からの主体によって我有化され次なる高揚段階へと進行していくという論によって有機的プロセスの流れとして連続延長の論として、二分化されることなく世界の明確な道筋を与えられ存立することができることになるのである。かくして人格論のしかも人格主体論が、此方の自我主体論とともに成立（両立）していくことになる。それは、その営みの元で個的人格から、総体人格への歩みをたどっていくが、個的人格も此方の世界においては対象化できない主体であるが、総体人格はさらに彼方の世界における主体性を高め、対象化できない流動性と多様性を堅固に持つ。したがってこれまでの諸稿のなかで強調してきたように前方の究極にある統合主体という実在による働きかけの態様の元にある連続の高揚による統合への道程にあって絶えず我有化されてゆくことが不可欠であり、その我有化によって、さらに前方の主体からの延長のなかにあることができ、それにより対象化の元にある自我領域から高揚する人格領域へのプロセスをたどることが可能になっていく⁽³¹⁾。

この我有化により一客体を主体的統合化へと誘ってゆく道は現実の一たる個の生きるプロセスへの整序的働きかけによって形作られていく。これは平等論の前提によって成就へ到る道程である。それは真の公共性への道となりそこに社会的人格たる総体人格が成立していくと理解することができる。それは福祉そのものの条件設定とそれを包摂していく主体的な人格性による我有化の営みへの道に他ならないのである。

それが福祉性の条件形成の意味であり、それはまた神の愛による有機的統合性の具体的意味となる。ここにおいて一たる存在が宗教性へと続く道筋のなかに位置づけられ、科学の究極としての宗教という姿を明瞭にしつつその包摂のなかで存在することが可能になる。宗教性の新たな次元の模索としての議論については、宗教、特にキリスト教の論理を信仰論及び東洋思想とも関連づけて、比較検討をも交え論じる論も広く展開されている⁽³²⁾。

7 福祉実践が人間世界の歩みの条件を整備する

まさに福祉学はわれわれが生きる現実の根底から人間世界の道程における人全ての生きるための条件整備を行っていくという存在にとって実践的意味を持っており、その細部にわたる解明という役割を果たしていく。ここにおいて作用としての土台を明確化する。その流れに即する為には、科学的宗教論とその理念軸としての愛と福祉を位置づけることが必要になる。福祉論の挿入により宗教が緊密に現実存在と結びついており、科学的宗教論と内実の成立する土台が築かれるその成立と深化という目途の成就についてさらに考察していかなければならない。そのために以下の議論を付加しておく。

公共性と社会的人格：ここにいう社会的人格、即ちシェーラーのいう総体人格とは、個的世界における私性の自己主義的側面を脱し、その内実に共同性及び協働性が浸透し個の行動において具体化されていく、その主体的側面である。それは彼方からの方向性の提示としての人格論としてシェーラーが示した内容のわれわれなりの受け止め方であったが、現実存在のなかのわれわれにとっては、個と社会的存立のバランスを経て、次第に社会的人格ともいえる人格性を身につけていく人間存在へのプロセスであるともいえる⁽³³⁾。それは前章でも触れたが、共にある状況のなかにおいて自己実現が図られていく人間の態様の模索とその実践的存立を意味する行為の連続となっていく。注意すべき観点に言及しておく、それは決して人格存在全体の一様化を意味するものではなく、個々の多様な存立が流動的に作用し合って、高揚した全体を創っていくというプロセスの進行を意味する。総体人格とはこのような態様への歩みを意味する。その態様が公共性の意味でもある。公共性という意味を軸にするとやや制度の側によった多様な人格的可能性の発揮の形態的とも見える全体を表現するということになろうが、しかし総体人格の態様には幅が内包されており、個的人格性の価値発揚の単なる全体ではなく、その個的価値発揚の側面から公的制度的な価値発揚の全体という意味合いまで幅を持って内包される様態をそこには把握することができる⁽³⁴⁾。その後者を「公共的人格」と呼ぶことにしよう、まさに社会的人格の「共同善」的側面であり、前述の T. H. マーシャルに続く人々の研究によるシティズンシップの論を想起せねばならない。それは、個的価値の発揮が社会的価値の創造と一致していくプロセスにおいて一致点を探求するなかでの前方からの人格性への作用に基づく訪れに他ならない。またそれは前方の統合性への進行において、愛による統合性という態様を強力にしていく生によって具体化されていく。さらに付言していくならば、公共性のなかにある効用論的側面、さらにそれとともに特に求められる効率的側面との両立性の困難をうちに含みながらも、それとの両立を図る調和点が求められ、それを導びくその他の基準が同時に要請されていくことに留意しておかねばならない。例えば、それは安定・安全基準が、いかに現状の制約のなかで効用・効率基準との対をなした検討のなかにおいて妥当とされるかということを重要な内容として含んでいる。安全・安定基準に照合してみると今現在の効率基準よりも高度化した設定が求められそれとどのように整合性を保つかが問われる、或は問われ続ける。ここには、公共性が共同善としての総体人格上の働きとして存在している。こうして「シティズンシップ」による基準値ができるかぎりの総意の元に見い出されてゆくことになる。それは市民が参考基準値との整合性の元にいかに決定するかに関わり。市民資格（適切な市民的対応力の保持）をいかに高く身につけているかが問われることになる。そこでは古くから論じられてきたように権利とともにいかに社会的人格性を持って奉仕しうるのが重要な課題とされる。責任の自覚がそれぞれの持てる発揚能力に添って発揮されていくことが不可欠となる。そこにはさらにいうならば、責任性を有する安全・安定さらに安心基準とともに、それが福祉基準に照合されることが求められる。それはその存在の個々に対する基準の平等な適用ということに他ならず。一たる個の存在価値を損なうことのない、

またそれ故に存在価値の発揚における平等条件の設定の下でそれが果たされていくという意味を堅固に内包する福祉基準の確実な設定履行ということの実現に他ならない。これが総体人格の存立そのものであり、それは前方からの統合性が愛という有様に満たされるときに可能となる社会的人格性の存立といえるものであり、総体人格という人格主体の有様を指し示している。

こうして、彼方からの統合作用を受け止め此方の福祉性との融合を図りつつそこに福祉という特に広義に捉えることのできる人間福祉の営みが制度・実践・技術・理念という有様として完備されていくことが求められ、それがあってくしてある様態となる。その総合化を果たす学的支援が人間福祉学であるということができよう。それは彼方からの統合性が愛の営みとして自我上の人間世界に降り注ぐことによって可能になってゆく有様の展開であるが、それは単に指針としての有様のみではなく、ホワイトヘッド流に量子論上の言説を用いていうならば、「現実的實在」の全体にわたる作用動向が、我有化され主体化していく有機的な営みを順当に果たし得たときにそのような上記してきた動態が自我世界の科学的営みへと作用化されていく。今そこにおいて、自我世界が消える訳でもなくまた人格領域が全てを飲み込む訳でもなく、自我と人格の両極存在が、両立しながら効用を辿る道程が統合性の保持故に両立的に位置づけられてあるに過ぎない。そこにあるのは全体の高揚である。またそこには統合主体の元に段階を経て客体化されてゆくプロセスがある。

われわれの現代における指向の道筋には此方の諸現実から人間における諸事実に関する知識的集積と分析によって、一定の見解を導きだし、此方の諸現実にかに根付いているかをもってその学的受け入れが決定されその定立がなされるかという方途が一般的となっている。ここに示されているのは事実としての内実の半面或は部分的真実に過ぎないということであり、決してそれをもって科学的とはいえないということである。いわゆる科学の進歩というもののはどのように理解されるべきであろうか、ホワイトヘッドは、それを自然界に例をとって次のように理解する。「自然界においては」科学の進歩に伴い「相互的諸関係における複合性を識別するようになる」「そこには主要な諸観念の一種の単純化が存在している。」という。それはホワイトヘッドのいう「合理的宗教」によって調整・補足されてゆかねばならないとされる⁽³⁵⁾。「合理的宗教は、その用語の吟味の為に形而上学の助けを求めなければならない。それは、それ自身の独立した明証性を提示」し、形而上学による再吟味を要するのである⁽³⁶⁾。われわれが生を把握していくにあたって、生の事実としてみるところを越え出たところに生のなんらかの様相が横たわっている。そうして「われわれがこれを事実のなかに包含するとき」「なお性質の性質が除外されたものとしてある」。ホワイトヘッドは、こうした言説を次のように締めくくる。宗教とは、このように現に把握されている諸事「(幸福や快樂)を越えたところに現実的かつ推移的そのものの機能がなお残存しているということ、すなわち、この機能がその性質を不減の一事実として世界に告知を与える秩序に付与することの直接的な理解である」⁽³⁷⁾。以上のような宗教性はいかなる宗教観に基づくのであろうか。それは、現代社会、さらに広く現代文化における「合理的宗教の存在」という彼の言説に明らかである。上

述してきた言説は、様々な諸事実の転移を示唆するといえようが、そうした転移の「先立つ基盤として」神が実在する。神はこうした彼方からの全体を包摂する基盤として世界に作用しそのなかにおける機能という役割を担う。さらにそれにより全体の統合化を最終的に保つことを可とする作用として延長を果たしていくことを許容する⁽³⁸⁾。

ここにホワイトヘッドのいう此方における自我世界の諸客体の永遠的客体化の履行がある。それを可能にするのは全体統合化の愛の営みを自我上においてさらに段階的人格主体化のプロセスのうちに実現していく存在価値の充足という意味を持つ作用であり、それをわれわれの生きる現実のうちに具体化するのが、福祉性の条件整序なのである。制度的条件の整序、実践上の整序、そうしてその全てを支えていく理念上の整序と高度化の進行がそれを可能にしていく道の基軸にある。

結語

以上の議論の元に、人間福祉学は有機的世界観の具体化としての意味を持ち実践の要となる。ホワイトヘッドはいう。「キリスト教のガリラヤの起源」は、「それが強調するのは、統治するシーザーでも、仮借ない道德家でも、不動の動者でもない。」「それは世界のうちで、緩やかに、そして静観のうちに愛によって働く優しい要素に依拠する」と⁽³⁹⁾。その要素とは、上述してきた存在の位置を形作りその永続への道へと誘っていく軸芯たる福祉条件の整序に他ならず、換言するならば福祉性そのものということができるであろう。この福祉性の存続によって、多様な存在の一たる存在の価値は意味を発揮し、永続へと誘われ、統合性のなかに身をゆだねていくことができる。その統合性という全体に働く作用は、各様の層をなして創造への道を形作っていく。それをホワイトヘッドの宗教観に添った議論に従って少しく解題しておく。

それは彼のいう神の結果的本性との関わりにおいて述べられている。しかしこの結果的本性をもって全てが停止するというようなものではなく、さらなる展開として時間的世界へと移行していくとも述べている。こうして宇宙がその現実性を成就させるとするのであるが、彼はそこに4つの相を提示している。①「価値づけの調整における無限な概念的創始性の相」、②「現実態の諸多性を伴った物的創始性の時間の相」、③「完成された現実態の相」、この相においては、「多は、個体的同一性にせよ統一性の完結性にせよ、失われるという制約なしに永続的に一である。」とされる。④この相において「創造の働きは完結される」とされ、「完結された現実性は逆に時間的世界に移行し」、「この世界を制約して、時間的現実態がそれに関連ある経験の直線の事実として含み」込んでいくことになる⁽⁴⁰⁾。したがってこの「相の働きは、神の世界に対する愛」ということができる。この愛と軸芯を同じくさせていくことができる時間的世界のプロセスが、福祉性に他ならないということになる。これは神の結果的本性の時間的世界への還流であるとともに、この還流に応答していく環境世界、そこに生きる人間の世界、その内的即ち文化的世界であり、それは制度・政策、実

践、技術の現実性を介して人間の一たる存在への道に続くことになる⁽⁴¹⁾。こうして永遠的客体化が主体の我有化という神の統合化作用が時間的世界へと浸透しかつ作動していく。

神の結果的本性は、世界全体への包括力の作用であり、それはまたその要素をもって作用化されていく。この要素とは価値であり、ホワイトヘッドによれば、「偏することのない緒目的へと向けられる」⁽⁴²⁾。そうしてそれは、「われわれ自身への諸価値を越えて他の人々の為の価値へと拡大する」。また「他の人々への価値の獲得がわれわれ自身の為の価値へと変容する。」即ち「神は世界における結合的要素である。」とされるのである⁽⁴³⁾。

こうして、神は存在する一たる個々にその持つ価値の発揮を許し与える。まさしくホワイトヘッドがいうように、「神は全ての被造物にそれ自身の偉大さを明示する鍵である」。さらに続けていわれるように「これは善性の回復という形」をもって「現実的悪の理念的視力を包括し」、それによって「善による悪の克服」ともなる⁽⁴⁴⁾。そのなかにおいて、神は苦悩の洞察を諸価値へと目を開かせることによってなさしめる。これはまさしく上述の福祉への道程を開き、「神自らの制限によって人間を善性へと導出する」。神はこのように「価値のあらゆる可能性を規定するという意味で完全である」とされている。この善性による価値づけの基底において福祉性という価値づけが「等位化し調整」されることになる。かくして「神の本性は、理念的形相の領域の完全な概念的実在化である」とされるのである⁽⁴⁵⁾。

この神の結果的本性の時間世界への還流は、人格領域においては「秘奥人格」とシェーラーが呼ぶ作用領域と理解することができる。これは個の人格や総体人格を越え出た人格領域である。シェーラーは「人間存在の本質性を孤独のなかに見出している」。その孤独が「本質的にそこに位置づく唯一の共同体関係」を「神との関係」としている⁽⁴⁶⁾。この関係性は宗教共同体のなかでのみ「秘奥的体验内実」として経験可能であるといわれる。「宗教的な心情的共同体、文化的共同体および国家的共同体」に伴われることにより、「愛の本質に向けられた指向性の内実のうちに超越的な特徴と永遠性の意味を付与する」とシェーラーは説く⁽⁴⁷⁾。

愛による統合性によって、世界の永続が可能となり、その作用の世界における土台となるのが、われわれの存在世界においては福祉性という実践行為であり、その条件整序となる行為の作用化が、統合的な世界の営みに寄与していく。

こうして福祉の現実軸に内在する困難な生き辛さの克服という課題解決の実践を軸として含み込むことによって、神の意志に基づく有機的世界の営みが具体化されていき、その試みを続けていくことによって世界の永続が保持されていく。この有機的世界観が、その要にある福祉性の作用、即ち神の人間世界への作用上の還流たる愛の統合性によって、その永続的な統合性へ向かう動態が世界の主体軸に添って永続的に生み出されていく。

注

- (1) 周知のように、1948 年、この年に国際連合総会において採択。地球上の全人民と国が達成すべき基準を定めた。
- (2) 牛津信忠「人間福祉学における『プロセス哲学』の意味と可能性」Part I～Ⅲ、聖学院大学論叢 29 巻 1 号 (2016 年)、30 巻 1 号 (2017 年) および 2 号 (2018 年)。
- (3) われわれは、このドイツ流の社会政策論とその日本での展開論をエドアルト・ハイマンの社会経済体制論との対比性の元に考察し、人間の主体性の立場に立った福祉論を構築してきた。ハイマンが good life を目指す経済社会を念頭に置き解明を進めるのに対し、日本におけるドイツ流の社会政策論の立場からは、ハイマンの議論は「生命史観」に立つ観念論であるという批判 (大河内一男) がなされ、「労働力の保全培養」論を生存基準とする論が標榜された。拙稿「社会政策と社会経済体制—E. ハイマンの社会政策論の現代的再構成を目指して」長崎外国語短期大学論叢 23 号、1980 年、78-79 頁。拙著「社会福祉における相互的人格主義 I」久美出版、2008 年、17-21 頁。
- (4) 牛津信忠「福祉形成における両極性と相互包摂性」聖学院大学論叢、31 巻、1 号、2018 年、13 頁、21 頁。
- (5) 同拙論、26 頁。
- (6) 牛津信忠「社会福祉における相互的人格主義 II」久美出版、2008 年、5 頁、17 頁。
- (7) 同書、5-6 頁。及び LITTLE, I.M.D. “A Critique of Economics, Clarendon Press, 1957, Oxford Paperbackbacks, 1960. pp. 258-273, p. 274 参照。
- (8) 同書、6-7 頁。
- (9) 同書、7 頁。及び Arrow, Kenneth J., Social Choice and Individual Values, second edition, Yale University, 1963, 長名寛明訳「社会的選択と個人的評価」日本経済新聞、1977 年、73-96 頁の「一般可能性定理」に関する記述参照。
この例外的ケースとして、選択対象が二つで二者択一である場合、加えて討論や説得が徹底してなされ全員的一致が導かれる場合、さらに選考環境が突出している (single peakedness) 場合等が挙げられ、そうした条件の下では、容易に社会的序列が形成されるとしている。
- (10) 同書、8-10 頁。及び Rothenberg, J., The Measurement of Social Welfare, Printice Hall, 1970, p. 310, pp. 315-325 参照。
- (11) 同書、11 頁。注記 11-14 の箇所を上掲「相互的人格主義 II」におけるアマルチア・センの福祉基準に関する議論、及び彼の潜在能力アプローチについての記述をしている。参照されたい。
- (12) 同書、12 頁、16-18 頁。
- (13) 同書、20-21 頁。Sen, A. “On Ethics & Economics, Blackwell, 1987, 徳永澄憲、松本保美、青山治城訳「経済学の再生—道徳哲学への回帰」麗澤大学出版界、2002 年、102-105 頁。
- (14) 同書、30-32 頁。
- (15) Whitehead, A. N., “Process and Reality, 1927-28”. Cambridge edition 1929, 山本誠作訳「過程と實在 (上)」, (著作集 10), 松籟社、1984 年、147 頁。
- (16) 上掲「社会福祉における相互的人格主義 I」における人格論。本著の第二章を参照されたい。
- (17) 上掲訳書「過程と實在上」283 頁。
- (18) 同書、282-283 頁。
- (19) 同書、183 頁。
- (20) 前掲、「社会福祉における相互的人格主義 II」, 33-34 頁。
- (21) 山本誠作「ホワイトヘッド過程と實在」, 見洋書房、2011 年、65 頁、66-67 頁。
- (22) 論叢 31 巻 1 号における関連論の箇所、特に 28 頁。
- (23) 効率効用論によるのではなく、人間存在そのものの生の態様としての価値存在とそこに注がれる愛による統合性への誘いの融合的存立がこの存在価値論のなかにはある。これはいうなれば、真の存在価値への「帰還 (recover)」であるとも理解することができる、帰還 (recovery) については

- Warren, K. "Social work monographs; Exploring the Concept of Recovery from the perspective with Mental problems, Social work monographs, (monograph 198) Norwick, 2003, 15". 参照。
- (24) 社会福祉における存在価値論といえるエロスとアガペの対比における存在価値論が根底にある。われわれはこの議論に即する、かつて嶋田啓一郎がムスターカス、クラークの著書「個性と出会い」に対し、自我領域の出会いに終始する彼の議論に「永遠の汝」を発見することを呼びかけた一文を参照しておきたい。それは対象化の世界に留まる科学に対するその超克の呼びかけである。「宗教的愛、即ちアガペは、『私は汝を愛する、汝はかく存在するから』という無条件的愛である」。ここには存在価値の本意が表現されている。Clark Moustakas, "Individuality and Encounter", Doyle, 嶋田啓一郎・嶋田津矢子訳「個性と出会い」, ミネルヴァ書房, 1970年, (訳者あとがき219頁)。
- (25) 上述の議論と関連づけて理解するときに、自我上の命題的感じという経験状況に伴う情緒から開始され知覚へ達していくプロセスに表出されていく自我上の存在の価値と、絶えざる人間存在へのまなざしのなかにある、人格価値としての主体的存在価値を想起しその両者の両極的両立がここでは存在価値の内実であるといえる。
- (26) 前掲, 「福祉における相互的人格主義 I」159-160頁。
- (27) 同上, 161頁。
- (28) 同上, 161頁。同書の「相互的人格主義」における図5-4, 及び5-5。
- (29) 同上, 162頁。同書の5-5図及び図5-6を参照されたい。
- (30) 同上, 206-208頁。
- (31) 同上, 60-61頁, 63-64頁。
- (32) 山本誠作「ホワイトヘッドと西田哲学」行路社, 1985年, 第4章及び第6章における西田哲学との比較考察。また延原時行「ホワイトヘッドと西田哲学の間」法蔵館, 2001年におけるプロセス仏教論への言及等。
- (33) 牛津信忠「社会福祉における場の究明」丸善プラネット, 2012年, 62頁。
- (34) 上掲同書, 59-60頁。
- (35) Whitehead, A. N., "Religion in the Making", Cambridge, 1926 齋藤繁雄訳「宗教とその形成」(著作集7) 松籟社, 1986年, 43頁。
- (36) 同書, 45頁。
- (37) 同書, 46頁。
- (38) 同書, 16頁, 45頁, 90頁。
- (39) 前掲書「過程と実在 下」(著作集11) 611頁。
- (40) 上掲同書, 625頁。
- (41) 同書, 625-626頁。
- (42) 前掲書「宗教とその形成」93頁。
- (43) 同書, 93-94頁。
- (44) 同書, 91頁。
- (45) 同書, 90-91頁。
- (46) 前掲書「社会福祉における場の究明」65頁。
- (47) 同書, 32-33頁。

Organic worldviews and the elucidation of welfare as the recovery of the value of existence as an individual

Nobutada USHIZU

Abstract

This article investigates how welfare problems and difficulty in life are positioned in welfare philosophy, such that it contrasts with previous expositions of welfare theory (mutual individualism and topos theory), following recent discussions by A. N. Whitehead and others who are suited to organic worldviews. In this study, we seek to establish that the foundation of welfare theory can be built to ensure the value sufficiency of human existence in the extended working of the world. This will clearly exhibit the perpetuity of existence and lead us to determine the religious dimension of human existence, while the substantiation of welfare practices exceeds the elucidation of the theory of the self (M. Scherler), resulting in the objectification of human beings, and to follow true individual establishment and subject formation.

Key words: recovery, value of existence, organic world view, mutual individualism, objectification